# 金龍済「鮮血の思出」の意義

## ――中野重治「雨の降る品川駅」の〈擬態〉を通じて――

萬田慶太

### 一、はじめに

中野重治の「雨の降る品川駅」（『改造』一九二九年二月）は、発表当時には、「わかれの抒情[1]」の結晶、または「反逆や憤怒」の抒情が「中野の固有な感情の歴史に媒介されてできている[2]」詩であると高く評価された。しかし、後に多くの論者によって「雨の降る品川駅」は、毀誉褒貶にさらされることとなる。

詩への否定的評価は、中野重治自身の自己批判からはじまる。中野重治は「著者うしろ書　楽しみと苦しみ、遊びと勉強」（『中野重治全集　第二四巻』筑摩書房、一九七七年九月）において、「むしろ私は仮りに天皇暗殺の類のことが考えられるとして、なぜ詩を書いた日本人本人にそれを考えさせなかつたか。なぜそれを、国を奪われたほうの朝鮮人の方に移そうとしたか。そこに私という国を奪つた側の日本人がいたということだつた。」と述べた。

李恢成は「中野重治と朝鮮」（『新日本文学』一九八〇年十二月）において、「最後の三行目のところが、「日本プロレタリアートの後だて、前だて」となっていますが、なぜ在日朝鮮人が――いかに祖国を植民地化されていたとはいえ――日本プロレタリアートの後だて前だて、になるのかという疑問が生じるのです。」と手厳しい批判を行った。「雨の降る品川駅」は、ＫＡＰＦ（朝鮮プロレタリア芸術家同盟）との国際連帯を契機に提出されており、ＮＡＰＦ（日本プロレタリア芸術家同盟）のＫＡＰＦ[3]に対する指導が当時連帯の背景にはあった。ＮＡＰＦはＫＡＰＦを一国一党の原則から組織下に置こうとし、また同時に植民地におけるプロレタリアートを自国の前衛と定義しようとした。「日本プロレタリアートの前だて後だて」という表現や朝鮮人表象、そして彼らが天皇暗殺をするという夢想は現代の目から見れば当然批判を受けざるを得ないだろう。しかし、全集編纂の作業を経て、中野重治自身による詩句の修正が行

われた後も「日本プロレタリアートの前だて後だて」の詩句は最終版においても消えることはなかった。

一方で、同時代のＫＡＰＦと中野重治の相互交流の資料は再注目される。申銀珠は、「〈朝鮮〉から見た中野重治――植民地知識人の自画像を求めて」（『国際日本文学研究集会会議録』一九九四年十月）において、林和「雨の降る品川駅埠頭」への影響を指摘した。Karen L. Thornber は "Early Twentieth-Century Intra-East Asian Literary Contact Nebulae: Censored Japanese Literature in Chinese and Korean"（The Journal of Asian Studies, Aug. 2009）において、ＫＡＰＦによる「雨の降る品川駅」の翻訳自体に、「雨の降る品川駅」原詩の完全な姿を見出すのではなく、批判的回答としての意味を見出そうとした。「雨の降る品川駅」低評価の裏には、領土や国民を再定義し、包括していく戦後日本の確立と日本共産党の国際路線放棄が深く関わっている。そして、「雨の降る品川駅」批判は同時に、〈在日〉文学の「雨の降る品川駅」の擬態と見なせる詩にも集中する。「雨の降る品川駅」や中野重治の〈在日〉文学における擬態はこれまで検討されてこなかった[4]。

本論では、ＫＡＰＦの金龍済の詩「鮮血の思出」を、「雨の降る品川駅」の〈擬態〉であったと見なしたい。金龍済の詩にはプロレタリア詩の系列から中野重治の影響が色濃くうかがえるのだが、それらを単純な模倣ではなく、もっと逸脱的で批判的な営為と見なしたいのである。一九三〇年代のＫＡＰＦ後期に登場した金龍済は先行研究が考えてきた植民地プロレタリア運動との交流を日本語詩の中で果たそうとした。

ここで用いられる〈擬態〉という概念をホミ・Ｋ・バーバ『文化の場所』（本橋哲也ほか訳、法政大学出版局、二〇〇五年二月、原著 Homi K. Bhabha, The Location of Culture, London and New York: Routledge, 1944）は以下のように定義している。

> 植民地的擬態とは、ほとんど同一だが完全には同一ではない差異の主体としての、矯正ずみで認識可能な〈他者〉に対する欲望ということになる。つまり、擬態の言説はアンビヴァレンスのまわりに構築されているということだ。それが有効であるためには、絶えず自らのずれ、過剰、差異を生産しなければならない。したがって私が擬態と呼んできたこの植民地的言説様式の権威は、不確定性に刺し貫かれている。擬態はそれ自体が否認のプロセスであるような差異の表象として現れる。二重の分節化の記号としての擬態。権力を視覚化してくれる〈他者〉を「領有する」、改良と規制と規律との複合的な戦略。しかしそれはまた不適切なものの記号、つまり植民地権力の支配的な戦略作用を首尾一貫させ、監視を強化し、「規範化された」知識と規制力との両方に対して内在的な脅威になるという、差異

あるいは抵抗の記号でもあるのだ。

「雨の降る品川駅」の擬態とは、日本語詩や日本共産党の指針に対してほとんど完全な同一化や規律化が図られるにも関わらず、しかし詩の読解としては原詩に対する批判的置き換え、逸脱、批評になっているような事態を指す。つまり〈在日〉文学における植民地的擬態はまず、日本という対象に対して部分的協力の方針を示す。しかし、そこには朝鮮が植民地支配されており、プロレタリア文学の内部においても差別や問題が生じていることの矛盾の痕跡が残る。その矛盾の痕跡は日本プロレタリア文学や「雨の降る品川駅」の内部の規範と反倫理に対する同時的な批判に他ならない。

まず、「雨の降る品川駅」における「凍る」河の表象を具体的に確認し、原詩において満州・朝鮮国境線付近がプロレタリア国際連帯の上でどのように提出されたのかを探る。この「凍る」河の表象は、「雨の降る品川駅」の擬態において、金龍済の詩のみならず幾度も提出されてきた素材であった。

次に、金龍済「鮮血の思出」を取りあげる。「鮮血の思出」は、「雨の降る品川駅」の「温もりある、、の歓喜のなかに泣き笑へ」に対し、「復×のよろこびに酔ふまでは!」と日本のプロレタリア文学に一部門化されたKAPFの東京の在日朝鮮人として〈応答してしまった〉プロレタリア国際連帯のための詩であった。しかし、「鮮血の思出」を擬態と見なせば、抑圧されていたその批判性が浮かび上がってくる。

本論の目的は、〈在日〉文学が擬態をもって、いかにテクストを生成しえたかを明らかにすることである。本論では、「雨の降る品川駅」を日本プロレタリア・リアリズムとして受容し、または反発してきた金龍済の「鮮血の思出」における擬態としての批判性を読み取り、〈在日〉日本語文学としての可能性を考えたい。

## 二、「雨の降る品川駅」における「凍る」河

「雨の降る品川駅」は「辛」や「金」、「李」、「もう一人の李」である「君ら」という三人称へ向けて呼びかける詩である。「さやうなら」と抒情的に呼びかけた後、「君らは雨の降る品川駅から乗車する」、「君らは君らの父母の国に帰る」と断言調で結ばれている。全体的に品川駅の様子は機械的で断言的に「鳩は雨に濡れて煙のなかを車庫の屋根から舞ひ下りる」、「降りしぶく雨のなかに緑のシグナルは上がる」と描写されている。「雨の降る品川駅」は先行研究において既に、伏字部分である騎乗した天皇の表象、品川駅構内の様子などが検討されている。詩は「君ら」が乗車したところで最大の抑揚を迎える。全体を貫くのは自然物としての「雨」のイメージで、これらが「寒い冬に凍る」河のイメージに流入している。

君らの国の河は寒い冬に凍る／君らの反逆する心は別れの一瞬に凍る

この「君らの反逆する心」に喩えられる「寒い冬に凍る」河のイメージは、後半連に再登場して、伏字つき初出の最大の読みどころとなっている。[5] それらは追放される朝鮮の同志たちに革命への決意をうながすものであった。

行ってあの堅い　厚い　なめらかな氷を叩き割れ／長く堰かれて居た水をしてほとばしらしめよ

別れに際して凍っていた「君ら」の心は朝鮮を表象する河に転移し、「朝鮮の男であり女である君ら」、「底の底までふてぶてしい仲間」は、革命的に「凍る」河を叩き割る。言わば、そこでは「堅い　厚い　なめらかな氷」は長く資本によって膠着化している、朝鮮・満州国境地域の比喩となり、「堰かれて居た水をしてほとばしらしめ」るように解放されるよう求めている。そこでは別れに際して凍っていた君らの心も朝鮮の「ふてぶてしい仲間」によって自ら叩き割られるであろう。最後の呼びかけである「行ってあの堅い　厚い　なめらかな氷を叩き割れ／長く堰かれて居た水をしてほとばしらしめよ」という朝鮮の革命への祈念は、これらの自然物として生成流動する「雨」のイメージに支えられている。

しかし、従来の「雨の降る品川駅」研究では、朝鮮の「凍る」河の表象は何を指示するのか、具体的には検討されてこなかった。この朝鮮の凍る河とはソヴィエト・満州・朝鮮国境地域の鴨緑江であったと考えられる。浜井松之助『満州写真帖』（大阪屋号書店、一九一三年五月）は当時の満州地域を取り扱った地誌的なグラフである。日本資本からの視点で描かれており、「夏期ノ鴨緑江」として木材集積地としての鴨緑江の写真と共に、「鴨緑江氷上帆掛滑走」として凍結した鴨緑江の写真を掲載している。解説には、「鴨緑江ハ常ニ木材集散ノ為メ船舶出入ノ絶エルコトナク（中略）一度冬期結氷セバ渺々タル一大氷野ト化ス而モ寒風烈風ヲモノトモセズ氷滑大会ノ開催ヲ見ル」とある。『満州写真帖』の鴨緑江凍結の写真は植民地下での厳しい気候状況を特殊な地誌として表象したものであったと言える。

また、当時労働者や花柳界で歌われた「鴨緑江節」にも朝鮮を代表するものとしての凍る鴨緑江が登場する。歌詞には異同があるが、「朝鮮と支那の境の　あの鴨緑江　流す筏は　アリャ　よけれども　雪や氷に　ヤッコラ　とざされるヨ　あすはまた　新義川につきかねる　チョイチョイ」と歌われている（「鴨緑江節」仲井幸二郎ら編『日本民謡辞典』東京堂出版、一九七二年九月）。これらはいかに日本資本と日本労働者による鴨緑江の木材事業が盛んであっ

たかを示す実例であろう。管見の限りでは中野重治自身には、戦前、朝鮮・中国を旅行した経験はなく、鴨緑江表象は伝聞や右のような地誌に基づくものと考えられる。

また、朝鮮・満州地域は、日本が資本投下しており、国際的なプロレタリア連帯が必要として、プロレタリア文学においては、一九二〇年代後半から一九三〇年代にかけてよく登場した地域である。プロレタリア文学にとって満州朝鮮国境地域は、ソヴィエトとも国境を接しており、国境を乗り越えて亡命または革命を輸入する可能性を持つと同時に、日本国家とソヴィエト、中国との係争中の地域であった。同時期の黒島伝治「国境」(『戦旗』一九三一年二月号)では「ブラゴウエシチェンスク」と「黒河」を隔てる「黒龍江」が描かれた。そこでは密輸入者と労働者が国境の間で移動する。しかし、最後には「黒龍江の結氷が轟音と共に破れ、氷塊は、濁流に押し流されて動き出す春」がやってくる。そこでは「民族のみぞ」としての河が描かれる。

また、宮本百合子「ズラかつた信吉」(『改造』一九三一年六月-九月)では、「春、解氷期になると、ロシアじゅうの川は気ぜわしく泡立ちながら氾濫する。今こうやって氷の上へぶちこまれている材木は、アムグーン川の氷がとけて水嵩がますと一緒に、河口までひとりでに押し出されるという寸法だ。」と描写され、信吉という国境労働者は雪解けと共にソビエトへ脱出する。

このようにプロレタリア国際連帯の段階においては、国境とくに満州朝鮮地域が注目されており、「雨の降る品川駅」で歌われた「凍る」河の解氷は解放や越境の表象であると見なすことができる。生成流動する水と国境線としての凍る河と河への革命の祈念のイメージは、この詩の最大の特徴である。

ここでは直接触れないが、戦後の〈在日〉文学の多くの「雨の降る品川駅」擬態の中でも、この「凍る」河と「堰かれてゐた水」のイメージは逸脱的に幾度も反復されることになる。重要なのはこれらの「堰かれて居た水」表象のほとんどが〈在日〉文学においては、国境地域ではなく、国境内国境線とも呼べる日本国内の表象に擬態的に置き換えられていることであった。

以上、「雨の降る品川駅」においては、朝鮮という植民地との連帯がエネルギーの放出を求める氷に閉ざされた河という表象で提出されていることを確認した。そして、それらは流浪の民の記憶であると同時に、通俗的植民地表象でもあり、日本人プロレタリア作家によって、ソビエトとも国境を接する解放、越境、革命のイメージで語られていることも確認した。このプロレタリア国際連帯が現代的に見て批判を受けざるを得ないのは本論の一で確認した通りである。では、〈在日〉文学の側はどのように応答したのだろうか。

## 三、金龍済「鮮血の思出――九月一日のために――」（『戦旗』一九三一年九月）

先行研究においてＫＡＰＦの中野重治への応答や関係性は注目されてきたが、ＫＡＰＦ後期の金龍済の詩で「雨の降る品川駅」の擬態と見なせるものが存在することについては言及がない。金龍済の伝記的事実、翻訳などは大村益夫『愛する大陸よ――詩人金龍済研究』（大和書房、一九九二年三月）に詳しい。[6]

金は一九〇九年朝鮮忠清北道陰城郡で生れ、一九二七年学業のため来日、西巣鴨で新聞配達の仕事についた。やがてＫＡＰＦメンバーとして「玄界灘」（『プロレタリア詩』一九三一年三月）、「牛乳配達の朝」（『プロレタリア詩』一九三一年十二月号）などで日本語プロレタリア文学に登場する。一九三二年六月逮捕、投獄され、非転向を貫く。しかし、最終的に一九三六年朝鮮に強制送還され、戦中親日派に転向し、『亜細亜詩集』（大同出版社、一九四二年十二月）などの翼賛的な詩を書くことになる。そして、戦後は韓国において反共詩を書くに至る活動を行った。また、金は中野重治の妹で詩人の中野鈴子と一時結婚を約束するまでの恋愛関係にあった。婚約の破談と共に中野とは疎遠になるが、それまでは中野とかなり親交の深い〈在日〉朝鮮人作家であった。以下に紹介も兼ねて長くはなるが、金の「鮮血の思出」全文を引用する。

八月の太陽は熱く／土まみれのドンブリで汗はぐつしよりだ／道路工事の最中／俺のツルハシめ／エンギでもねえものを掘り出しやがつた／あさましい人間の白骨を！／俺はこの白骨を瞠つめ唇を噛んでつぶやく／「震災当時に××された／朝鮮労働者の――それかも！」／おゝ　もしその犠牲の一片ならばと／俺の胸板にギリ〳〵深く釘打つもの――／あのむごい思出のなかに／恨みを重ねたこの白骨の年齢を指折つて見る／俺は額の汗を手の甲でふき／燃えひろがる夏の雲に考へを走らせる／そして震災当時の空色を思ひ浮べる――／熱気をふくみ／不吉をはらんだ空気が／地上の灰燼と鮮血をぼかした幕のやうに／暴徒と×××の不安にすごく燃えてたことを！／俺はこのほこりを運ぶ風に／震災当時の風を思ひ出す――／おしつぶされた若い娘の胸や／×まみれの土工の胸を切る生臭い風が／逃げまどふ俺の髪を吹乱だし／おののく胸をえぐり抜き／燃え残つた街路樹の黒い枝にすゝり泣いてたことを！／俺はこの猫の腐つてるドブ川に思ひ出す――／逃げ場を失つた俺は／ドブ川の小さな石橋の影にかくれてたら／橋の上を叩く騎兵馬の蹄の響き！／×に飢えた竹槍を引きづる音！／俺はその度に／×に淀んだドブ水に頭を入れ　息を殺した／その時／人間の手足がぬら〳〵と首すぢにからんで流れてた事を！／おお　親愛なる日本の労働者たちよ！／この白骨の冷たい悲しみは／生きた労働者の鉄

の意志とひとすぢだ／同じ敵への激しい憎しみと憤りをこめて／被圧迫階級の反逆の誓ひを美く刻みつけよう／――プロレタリアに国境はない！／――民族のみぞを埋め立てろ！／なあ兄弟！／震災当時労働者でありながら／朝鮮人ののど笛を日本の××で／野獣の喚きをあげてブツ×した奴もゐるだらう／だが兄弟　俺達に過去がなんであらう／労働者の悔ひに泣き／労働者の誓ひにごつい手を握りながら／あの鮮×の思出をしやべらうぢやねえか！／今年の九月一日を／戦ひをもつて迎へようではねえか！／九月一日は迫つて来る！／支配階級は俺達に／この日の恨みを忘れさせやうとあがき／なによりも／日鮮プロレタリアの団結をおそれ／そしてそれを切り離さうと謀む支配階級／（だが　どつこいとさうはいかぬ！／この鮮血の思出がさらに燃え／複×のよろこびに酔ふまでは！）

「鮮血の思出」は国際プロレタリア連帯を企図して、朝鮮人の側から書かれたものであり、「――九月一日のために――」との副題からも分かるように、関東大震災の朝鮮人虐殺事件に対する抗議である。ここでは、「雨の降る品川駅」で労働者連帯的に歌われた同志追放の事件詩は、日本プロレタリア陣営が踏み込めなかった民族対立の事件詩となっている。ここに「雨の降る品川駅」からの一つの積極的逸脱が見出せる。

「鮮血の思出」は、「八月の太陽」の下、「道路工事の最中」に「俺」が人間の白骨を掘り出すところからはじまる。「俺」は関東大震災当時の朝鮮人虐殺事件に思いを巡らせる。想起される「震災当時の空色」は「地上の灰燼と鮮血をぼかした幕のやうに」燃えていたのであるが、そこに感情移入されるのは「暴徒と×××の不安」であり、日本人被災者とは別の不安である。朝鮮人虐殺事件は「おしつぶされた若い娘の胸や／×まみれの土工の胸を切る生臭い風」と映像的にリアリスティックに描写される。そのリアルな「風」は逃げる「俺」の髪や胸を吹き乱し、「街路樹の黒い枝にすゝり泣」くという現実上の優れた恐怖感情の比喩となって立ち現れる。虐殺事件の被害者側から見た怖ろしさはまざまざと表現されている。

「俺」は「猫の腐つてるドブ川」と近代日本の川の汚泥を表現する。「逃げ場を失つた俺」は、ドブ川の石橋に隠れざるを得なかった。「橋の上を叩く騎兵馬の蹄の響き！／×に飢えた竹槍を引きづる音！」の部分は、虐殺を行う騎兵馬の帝国主義的側面の無機的な表象となっている。このように敵対するテロルを無機的に描くことは、「雨の降る品川駅」の騎乗した天皇表象と似通っている。「髭眼鏡　猫背」の昭和天皇の騎乗像は戦前伏字であったが金は前に述べた通り中野と親しい関係にあったこともあり、伏字以前の原稿にふれていた可能性が存する。そして、「俺」が「×に淀んだドブ水に頭を入れ」ると、「人間の手足がぬら〳〵と首すぢにからんで流

れてた」という虐殺事件のあまりに生々しく残酷な証明が衝撃的に告げられるのである。

しかし、前半連で朝鮮人虐殺事件の衝撃的でリアルな告発と怨恨の流出であったものは、後半連で「生きた労働者の鉄の意志」や「被圧迫階級の反逆の誓ひ」に絡めとられてしまう。「俺」は「――プロレタリアに国境はない！／――民族のみぞを埋め立てろ！」とプロレタリア国際連帯を背景に大衆へ呼びかけるのである。しかし、ここで〈在日〉朝鮮人にとって「民族のみぞ」として提出されているのは、「なあ兄弟！／震災当時労働者でありながら／朝鮮人ののど笛を日本の××で／野獣の喚きをあげてブツ×した奴もゐるだらう」とあるように、日本人労働者や日本人群衆が虐殺に加担した可能性であった。また、ここでの「民族のみぞ」とは、日本のプロレタリア作家が連帯に際して描いたような、朝鮮・満州国境地域ではなく、関東大震災時に死体の手足が流れてきた、日本の「猫の腐つてるドブ川」なのである。

「鮮血の思出」は、「なによりも／日鮮プロレタリアの団結をおそれ／そしてそれを切り離さうと謀む支配階級／（だが　どつこいとさうはいかぬ！／この鮮血の思出がさらに燃え／複×のよろこびに酔ふまでは！）」とプロレタリア連帯への決意で結ばれる。この「この鮮血の思出がさらに燃え／復×のよろこびに酔ふまでは！」は、「雨の降る品川駅」の「温もりある、、の歓喜のなかに泣き笑へ」に対する応答であったと考えられる。初出時「雨の降る品川駅」の「、の歓喜」は伏字であり、金が二字のため予測で文字を起こした可能性も残るものの、「復讐」の伏字が起きていることから、金が中野の伏字以前の「雨の降る品川駅」原稿を直接見た可能性が生じる。金は、「雨の降る品川駅」を一つの手本として忠実に日本語プロレタリア・リアリズムを獲得しようとしたのであろう。また、その文学活動はＫＡＰＦとＮＡＰＦの国際連帯を目的とする組織の姿勢の元で、抑圧されていただろう。しかし、金の詩には「雨の降る品川駅」に影響されながらも、その詩句を擬態し、逸脱していった要素がある。金においては、「民族のみぞ」は何より関東大震災時の朝鮮人虐殺であり、鴨緑江ではなく、日本の「猫の腐つてるドブ川」という国境内国境線であった。「雨の降る品川駅」において、「凍」り、「長く堰かれて居た水をしてほとばし」ることが求められた鴨緑江は、戦前の〈在日〉朝鮮人によって、「民族のみぞ」としての国境内国境線に置き換えられた。この後も「雨の降る品川駅」擬態詩においては、雨や川が表象されるが、その解放されるべきエネルギーを持った国境は、日本国内にこそ敷かれていたと言える。ＫＡＰＦ後期の活動において、中野重治のプロレタリア国際連帯は、まず日本国内の国境線、ゲットーこそ、「叩き割」られるべきであったと、批判的に反復されたのである。(7)

## 四、おわりに

本論では中野重治「雨の降る品川駅」が金龍済「鮮血の思出」にいかに擬態されたか、プロレタリア文学の抱える矛盾の元で抑圧されつつ、いかに「雨の降る品川駅」にあった植民国側の観点を乗り越えられているか、論じてきた。

「雨の降る品川駅」はＫＡＰＦ同志の国外追放に対して歌われた事件詩であったが、「鮮血の思出」ではそれは関東大震災の朝鮮人虐殺事件に置き換えられた。中野にとって問題は国境地域であったかもしれないが、金龍済にとっての問題は朝鮮人虐殺事件という日本国内の事象であった。

「鮮血の思出」が朝鮮人虐殺事件のどの程度事実によっているのかは、確認不可能であるが、大村益夫『愛する大陸よ――詩人金龍済研究』（前掲）によれば、金は関東大震災時まだ来日しておらず、登場する「俺」を金龍済本人と見なすことはできない。恐らく知人などから取材した結果であろう。しかし、「道路工事の最中／俺のツルハシめ／エンギでもねえものを掘り出しやがつた／あさましい人間の白骨を！」という虐殺された人間の白骨が掘り起こされるということは、戦前十分にあり得た。社会主義者と朝鮮人が虐殺された亀戸事件においては、「亀戸署が深夜潜に平沢等の死体を発掘す　引渡しの前夜約束を破ったと総同盟側の大憤慨」（『朝日新聞』一九二三年十一月十四日朝）と「荒川放水路」に埋められていた朝鮮人と平沢計七ら社会主義者の遺骨が警察の手によって掘り起こされ、引き渡しが問題になっている。埼玉本庄市の事件であるが、北沢文武『大正の朝鮮人虐殺』（鳩の森書房、一九八〇年九月）では、「その白骨が出てきたのは、学校プールの建設工事が始まって、二日めか三日めのことでした。（中略）白骨の知覚に銅銭が六、七枚あって、土を落としてみると、刻んであるのは日本の文字や元号ではありませんでした。」と白骨が掘り出された際の証言がある。また、自警団のみならず戒厳令下の騎兵隊が虐殺に参加した例としては、亀戸の事件における習志野の騎兵連隊の関与が明らかにされている。『関東戒厳司令部詳報』（松尾章一監修『関東大震災政府陸海軍関係史料　第二巻』日本経済評論社、一九九七年三月所収）によれば、「大島町付近住民カ鮮人ヨリ危害ヲ受ケントセル際救援隊トシテ野重一ノ二岩波少尉来着シ騎十四ノ三浦少尉ト偶々会合シ朝鮮人ヲ包囲セントセル（中略）鮮人ハ全部殺害セラレタリ」と記載されている。いずれにせよ、「鮮血の思出」は亀戸事件などを元に構成されたものであるようだ。

ほとんどの朝鮮人虐殺事件が日本の川へ朝鮮人の群集を追い込む形で行われ、殺害、死体の投棄がそこで行われた。国境内国境線として「猫の腐ってるドブ川」と名指しされた川は、普段からの居住地域の一部であると共に、震災という危機に際しては、殺害の現場

の一部と化した。間違いなくこれらの日本の川は、「民族のみぞ」であり、鴨緑江のように解放の夢想が全く機能しない、硬直的に「堰かれている」国境線であった。金はその解決をプロレタリア国際連帯（ただし、朝鮮人虐殺事件という「民族のみぞ」を乗り越えた上での）に求めたが、その「民族のみぞ」は日本プロレタリア文学の盲点であったと言えよう。金龍済の「鮮血の思出」は最終的には労働者連帯を訴えているということの可否は置いても、「雨の降る品川駅」の単なる模倣でも応答でもなく、十分に日本社会を裁断し批判することを可能にしているのである。

〈注〉

（1）壺井繁治「「中野重治詩集」について」（『文庫』一九五六年一月）

（2）北川透『中野重治　近代日本詩人選15』（筑摩書房、一九八一年十月）ここで北川は停車場とか駅や凍る河などの光景は、中野自身の「内部の故郷の風景」であり、だからこそ具体性を持ち、主客の合一を成し遂げたと論じた。

（3）ＫＡＰＦとは一九二五年八月に結成された朝鮮プロレタリア芸術家同盟のことである。東京で活動を行っていた在日朝鮮人運動である第三戦線社は京城との連絡を契機に組織再編を行っていた。後にＫＡＰＦ東京支部が結成され、『芸術運動』や『無産者』などの雑誌が出版された。（高栄蘭「第3章　戦略としての「朝鮮」表象」『「戦後」というイデオロギー』藤原書店、二〇一〇年六月参照。）

（4）七十年代を半ばにして、中野の自己批判が行われたことにより、『季刊三千里』内でも「雨の降る品川駅」とその影響の批判が相次ぐ。久保田正文「贖罪主義からの解放」（『季刊三千里』一九八〇年春号）においては、中野の転向小説が批判され、「雨の降る品川駅」にもそのような「贖罪意識とおなじものがはたらいていたとは」、考えられないとしながらも、「はじめは悲劇、二度めは茶番」であり、日本の模倣詩のほとんどが「朝鮮に対する贖罪意識のすべてが、ステロタイプ化していたのではなかろうか」と問うている。久保田は模倣詩の例として壺井繁治の「十五円五十銭」（『新日本文学』一九四八年四月）を挙げている。

（5）佐藤健一「「雨の降る品川駅」について――「御大典記念」と挽歌の構想」（『語文』一九八八年十二月）は詩の国際連帯と天皇暗殺のくだりを詳細に検討している。また、申銀珠、趙珉淑、満田郁夫、林淑美「「雨の降る品川駅」のテキストについて、及びそれをめぐる議論についての共同研究（上）（中）（下）」（『梨の花通信』二〇〇一年四月、七月、九月）は韓国語訳詩との対照による伏字起こし、天皇表象の検討、詳細な注釈などを行った。

（6）大村益夫は『愛する大陸よ――詩人金龍済研究』（前掲）の中で「鮮血の思出」を同じく震災を扱った詩である金龍済「震災の思ひ出――九月一日のために」（『婦人戦旗』一九三一年十月）と並べて紹介する。「震災の思ひ出」は大村によれば、知人の実話を詩に移したものであり、「民族的復讐ではなく、国際的プロレタリア運動の中で解決をはかろうとした」ものであると論じている。

（7）しかし、金龍済は「玄界灘」（前掲）という〈在日〉的な国境線にまつわる詩を書いている。また別の機会においては、鴨緑江などの朝鮮・満州国境地域も「国境――十四周年の革命記念日に」（『ナップ』一九三一年十一月）という詩において歌っている。ここでは「憤懣の泡を噛む鴨緑江の渦巻きよ／×　する××　　ともに東洋一の鉄橋を呑み／

泥臭い黄海の彼方へ押し　　は何時だ（原文ママ）と鴨緑江は詩化されている。これらは「雨の降る品川駅」の反復表現と受け取れると共に、プロレタリア国際連帯の戦術が金に更に徹底化された結果でもあろう。

――まんだ・けいた、広島大学大学院文学研究科博士課程後期在学――